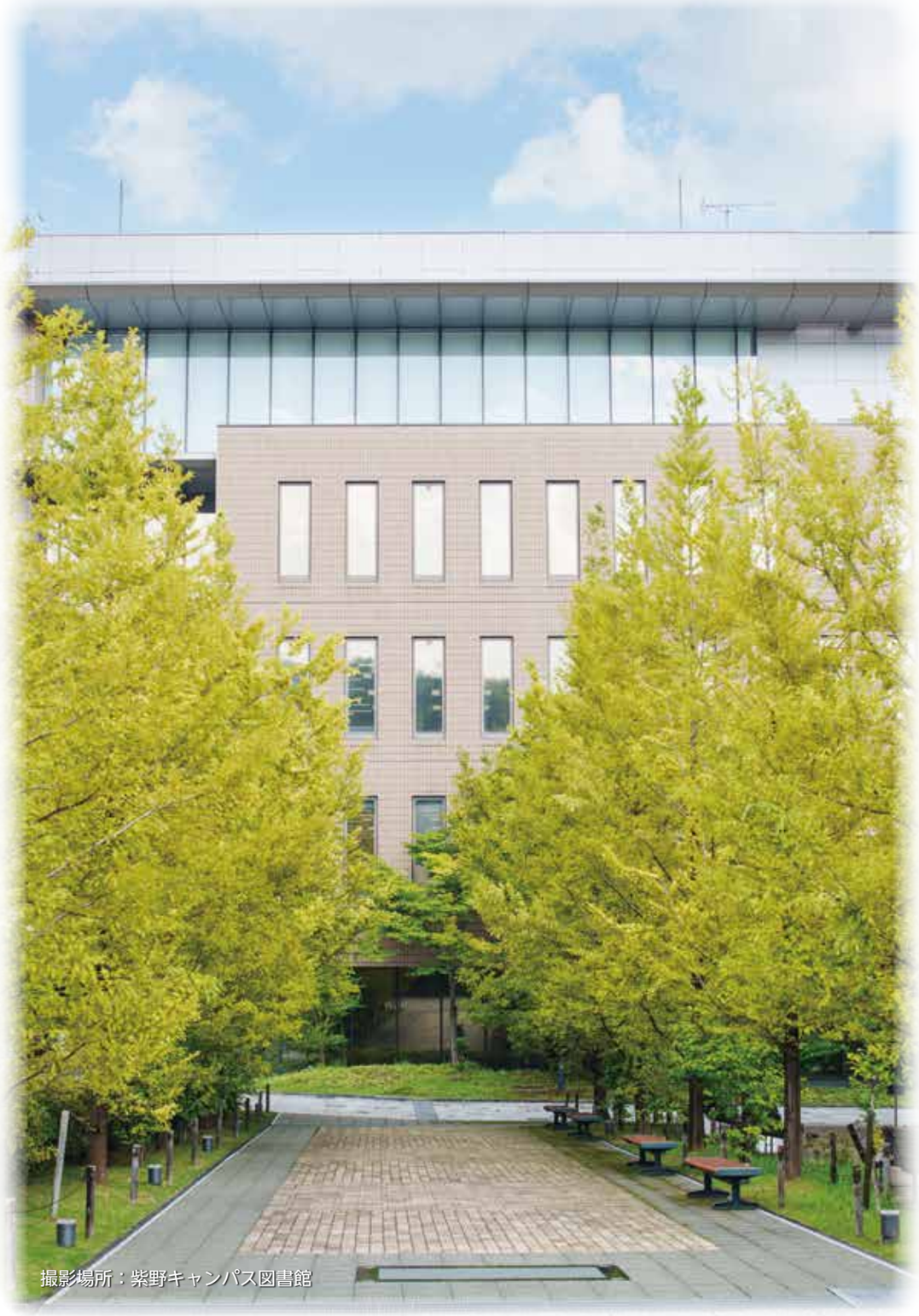
常照

佛教大学附属図書館

2026

NO 73

撮影場所：二条キャンパス図書室



撮影場所：紫野キャンパス図書館

佛教大学附属図書館

ISSN 0388-6700

ジャガンナート寺院の山車

附属図書館長・佛教大学副学長・仏教学部教授
細田 典明



二十八あるインドの州のなかで、オディシャ州(旧称オリッサ)の歴史と文化は異彩を放っています。特に州都ブバネーシュワル、プリー、コナーラクの三都市は巡礼地であり多くの人が集まります。

二〇一五年八月六日から五日間オディシャに滞在し、三都市の寺院をはじめとする施設を巡りました。そのなかで、プリーのジャガンナート寺院の入り口に置かれた三台の山車は祇園祭の山鉾を連想させ、とても印象深いものでした。当時はジャガンナート寺院の山車巡行(Jagannātha Ratha-Yātra)が、毎年ほぼ七月に、八日間に及ぶインド屈指の祭であることなどとはつゆ知らず、ここに掲載した写真を含む数枚の写真を撮影しました。二〇一五年には七月十八日から同月二十六日にわたって行われていたことから、山車巡行から二週間しか立っていないことも判り、三台の中央にある山車だけ布の覆いが外されていました。



プリーの山車
(Ratha, 2015.8.7撮影)



函谷鉾(2019.7.17撮影)

最終日の八月十日にはウトカル大学(ブバネーシュワル)でインドと日本の文化について講演しました。祇園祭の写真を集め、パワポで両方の山車が比較できるようにしましたが、学生さんたちは両者を食い入るように見入っていました。デリー大学で講演したときにも、リシュヤシュリンガ仙人が『一角仙人』として能舞台で演じられる場面を動画で紹介しましたが、同じようにとても感心していました。

プリーの山車にも車の側面や車輪に装飾が施され、三柱の神を乗せる三台の山車は日本では神輿と言うべきでしょうが、サンスクリット語ではすべて「車(ratha)」で表されます。むしろ大事な点は、年に一度の祭には多くの人が集まり、山車の上や周りで楽器を奏で、踊りを舞い、楽しむことにあるのでしょう。



ウトカル大学での講演に集まった学生
(2015.8.10撮影)

プリー生まれで関西在住、NPO法人インド日本友の会会長のクンナ・ダッシュさんは、オディシャを中心としたインド文化を積極的に紹介されてきましたが、日本人がつくった手作りの山車を地元インド人と一緒にプリーの町中で曳く行事を実現し、日本の祇園祭や文化をインド人に紹介するなど、日印の架け橋となる文化交流イベントを開催する活動をされています(https://www.facebook.com/India.Japan.Friendship.Center.Japan/)。さらに「ラタ・ヤットラ祭」と称して大阪をはじめとする各地でジャガンナートの山車祭が毎年開催されていることなど、祭が人種や宗教の枠を超え、人々をつなぎ、広がっていくものとなっています。

常照
佛教大学附属図書館報
2026 NO.73

ジャガンナート寺院の山車
附属図書館長・佛教大学副学長仏教学部教授　細田 典明　1

図書館所蔵の学術誌から読み解く近代の法然思想研究史
仏教学部仏教学科教授　齋藤 蒙光　2

あかねさす図書館にて
歴史学部歴史学科准教授　水田 大紀　6

「透視画」の流行について
―江戸（中・後期）の日本と清末中国の場合―
文学部中国学科教授　若杉 邦子　10

未知の世界への出発点としての図書館
―研究という冒険とフィールドワーク―
社会学部公共政策学科教授　水上 省吾　16

学術研究と知の探求を支える　新しい学習・研究空間
NEW　OPEN「二条キャンパス　2号館図書室」　20

佛教大学附属図書館の事業活動報告
（2025年度～2026年度前半期）　24

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来　25

図書館所蔵の
学術誌から読み解く

近代の法然思想研究史

佛教大学仏教学部教授　齋藤蒙光



佛教大学図書館は多くの書籍を所蔵しているが、中でも仏教関連の蔵書が特に充実しており、私のような仏教研究者にとっては非常にありがたい。私はかつて九年ほど東海地区の大学に勤めていた。その付属図書館でも積極的に仏教書を収集していたが、それでも急ぎ見たかった本が所蔵されておらず、嘆息した経験は一度ではない。特に学術誌の蔵書は限られており、本学に非常勤講師として訪れるたび、図書館でまとめて論文をコピーしていた。それらを持ち帰り本務校で目を通していると、文中で紹介されている論文がまた新たに見たくなる。しかし、それを見るには一週間ほど待たなければならない。そういう時間間隔で研究をしていた身からすると、いつでも見たい時に見たい論文をほぼ見ることの出来る本学は、とても恵まれた環境である。

そのため、本学の図書館の地下に籠り、学術誌を開いては目に付いた論文に目を通している時、とても贅沢をさせてもらっているように感じる（司書の皆様には、ご迷惑をおかけしているかもしれないが）。長い時間をかけて収集・保管されてきた膨大な数の論文からは、研究の対象である仏教文献やその思想、祖師たちの行実などに関する知識が得られるが、それだけではない。研究する側の多くの先達たちの、研究に対する意欲や問題意識などについても読み取ることができる。そして、そこには時代性も反映している。多くの学術誌を所蔵する棚が並ぶ地下の空間は、各時代の仏教研究の空気感をそのまま保管する巨大な貯蔵庫のように感じられる時もある。

今回は近代の仏教学、特に浄土宗の法然思想研究者たちの議論について少しご紹介したい。明治から昭和にかけて、宗派の枠を超え、時代に即応した新たな仏教思想の表現が模索された。西田幾多郎（一八七〇―一九四五）の親友であった鈴木大拙（一八七〇―一九六六）は、西洋哲学を援用しながら禅を中心とする仏教思想の特質を語った。浄土真宗大谷派の清沢満之（一八六三―一九〇三）も西洋哲学に関心を寄せ、その薫陶を受けた曽我量深（一八七五―一九七一）や金子大栄（一八八八―一九七六）らは、異端視されて宗門大学を追われながらも、親鸞の思想に対する独自の解釈を展開した。

浄土宗も例外ではない。その宗祖・法然（一一三三―一二一二）は、自らの賢さや志の高さゆえに「覚りを得られない」と苦悩した末に、当時の庶民の素朴で純真な宗教心に救いを見出した。すなわち、自らの知性を依り所とするのを止めて「愚痴（愚か）」という自覚に立ち返り、文字ひとつ読めず自分の名前すら書けない当時の庶民のように、ただただ大乗経典に記される神話の通り、仏の救済を信じるよう説いたのである。法然は、誰であれ「南無阿弥陀仏」と口にする称名念仏をひたすら行じた者は、人格仏である阿弥陀仏によって建立され、遥か西方に存在するという理想世界の極楽浄土へと往生する（生まれ変わる）ことができると説いた。だが明治期になると、その教えは迷信と揶揄されるようになり、現実逃避の「来世主義」だという批判に曝された。そのような風潮の中、山崎弁栄（一八五九―一九二〇）は明治二八（一八九五）年頃から、密教などの「根源仏」思想を基盤としつつキリスト教をも意識して、法然浄土教を絶対的一神教として再解釈する光明主義を提唱した。山崎は「阿弥陀」の名義である「無量光」に注目し、阿弥陀仏を全宇宙に霊的な光明を放つ根源仏と位置付けたのである。それに触発された椎尾弁匡（一八七六―一九七一）は、「阿弥陀」のもう一つの名義である「無量寿」に注目し、大正一一（一九二二）年頃から共生主義を説いた。椎尾は、生命そのものの進化力が「如来の大力」として、全時空に遍満していると解釈した。その力に覚醒させることで人々を「真生（真実の生き方）」へと促し、さらに社会・世界を向上・発展させるはたらきが「仏光の大用（無量光のはたらき）」であり、またその進化・覚醒が無際限に続いていくことが「寿王の大生（阿弥陀仏が無量寿を生きるということ）」だと主張したのである。両師は、阿弥陀仏や極楽浄土を汎神論的に解釈し、全時空に遍満する真理すなわち「法身法土」のように解釈したのである。

第二次世界大戦の終結後、日本印度学仏教学会など仏教に関する多くの学会が発足した。浄土宗でも宗内組織の教学院が昭和二二（一九四七）年より浄土宗学大会を開催し、その紀要として『仏教論叢』を発行するようになった。また同二六年には、望月文化研究所を前身とする仏教文化研究所（後に知恩院宗学研究所、さらに知恩院浄土宗学研究所へと改名）が開設され、『仏教文化研究』を刊行するようになった（『仏教文化研究』は後に浄土宗教学院の発行となる）。当時、それらの紀要においても「浄土宗教義の現代化」に注目が集まっている。『仏教論叢』第一号は「浄仏国土思想」をテーマとしており、著名な仏教学者でもあった知恩院門跡・望月信亨（一八六九―一九四八）の講演および、大野法道・江藤澄賢・千賀真順・香月乗光・藤田寛雅・佐藤賢順らによる共同研究が収録されている。その後、昭和三〇年代頃まで、『仏教論



叢』『仏教文化研究』には毎号のように、「往生浄土」の解釈を取沙汰する論文が掲載されている。その議論は、大まかには次の二つの立場へと集約できる。

浄土について

❶姿形のある異世界としての浄土から、姿形を超越して遍満する覚りの世界へと遡り、通仏教的な意義をも確立しようと試みる。

❷姿形を超越して遍満する覚りの世界から、姿形のある異世界としての浄土へと展開した、法然に至るまでの浄土教思想の独自性を重視するべきと主張する。

往生について

❶現世を問題視して、念仏および善行の実践や信の確立において体得した宗教的境地を、往生さらには覚りと等しいと見なす。

❷往生は命終後であることを強調。



いずれも①は、現代化を推進する立場である。当時の一般社会における死生観や人間観の変化に対する危機感や、宗学の枠に囚われない仏教学の発展、京都学派の哲学思想に裏打ちされた他宗の近代教学の隆興、光明会や共生会などの浄土宗内の運動に後押しされて、「浄土宗の教義を命の通わない定型化したものに止めてはならない」という問題意識を提起した。彼らがより現代的かつ自由に浄土宗の教義を論じようと試みることが、この活発な議論の契機となった。確かに自然科学が重視される近現代の社会においては、浄土を姿かたちに囚われない真理の世界とし、往生をも現世の問題とした方が賛同を得やすいのも理解できる。しかし、それでは浄土真宗など他宗の教義に近似し、法然浄土教の特色を失いかねない。そのような危機感から、伝統的な浄土宗の教義を守るべきだと反論する立場が②である。

この議論の象徴が、昭和四一（一九六六）年に開設されたばかりの知恩院浄土宗学研究所から発刊された、『往生浄土の理解と表現』である。この本では六六名の著名な宗門人が、学問の成果のみならず、自身の求道的課題や宗教体験をも反映させながら、浄土と往生の意義について論じている。そこでは①の立場に近い「伝統的理解と表現への反省を示すもの」が三一名に及ぶのに対し、②の立場に近い「伝統的な理解と表現に近いと思われるもの」は一〇名に留まる。



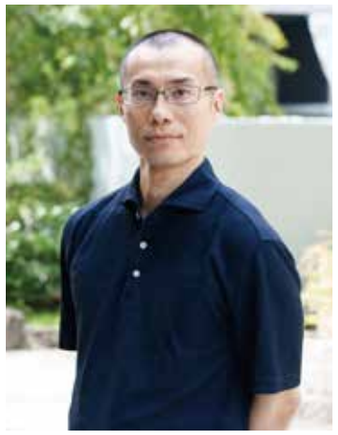
藤吉慈海編『往生浄土の理解と表現』（知恩院浄土宗学研究所、1966年）

同時期には、ドイツの神学者ルドルフ・カール・ブルトマン（一八八四―一九七六）が提唱した「非神話化」が話題となった。同年に知恩院浄土宗学研究所から発行された『浄土宗学研究』の第一号では、研究主任であった藤吉慈海（一九一五―一九九三）が①の立場から、「神話的なるものを排除してなお、宗教そのものに直参しうるとするならば、それはそれでよいわけであって、わざわざ非合理的な神話的表現の媒介を通す必要性はない」と主張している。それに対して研究員の清水澄は、自分本位な「非神話化」がなされないために、まずは徹底的に歴史的・批判的原典研究がなされねばならず、また浄土宗の聖典である「三経一論」や法然の言葉を受け止める側である自身の立ち位置、すなわち「凡夫」という自覚の徹底が先んじて必要であると反論している。まだ前身の知恩院宗学研究所であった時代に研究主任を務めた香月乗光（一九一〇―一九七二）や藤堂恭俊（一九一八―二〇〇〇）も、法然の仏教解釈へと立ち返るべきという態度を貫いた。さらに香月は、法然遺文には「往生」「浄土」の意味内容を説明する文言が少ないことから、「法然にとっては、浄土は何かの問題よりも、如何にすれば浄土に往生できるかの問題が、更に切実であり、緊要であったのである」と論じている。

次第に形勢は逆転し、「浄土宗教義の現代化」は自らの知性を依り処として、納得のいくように法然の思想を書き換える、恣意的で学問的裏付けのない態度であり、法然の「愚痴」の自覚に反するという批判に曝されるようになっていった。その中心人物であった藤吉が昭和五八（一九八三）年に浄土宗大本山光明寺の法主に晋山するなど世代交代が進むにつれ、文献学や歴史学を取り入れた実証的な研究に重きが置かれるようになっていく。思想研究においても法然の意図を正確に解読することが求められ、前述の香月氏の主張のように、「浄土」については論じないことをもって法然に順じる態度とする見解が拡がっていった。こうして年号が平成に変わる頃には、「往生浄土」を巡る議論は収束した。



その後、令和の今日にいたるまでに、仏教や浄土宗に関する文献研究や歴史研究は目覚ましい発展を遂げている。その反面、社会の価値観はさらに大きく変化しており、「往生浄土」をただ信じるという浄土宗の教義はより一層、受け入れ難いものとなりつつある。それにも関わらず、仏教や法然浄土教の思想を現代人にも端的に伝わるように表現しようとする試みは表立っては見られない。世代や立場の上下など何するものぞと信念に基づいた主張がなされ、活発に議論が重ねられていた時代の熱意には憧憬を感じずにおれない。その空気に触れようと、筆者は今日も図書館の地下を訪れるのである。



齋藤（さいとう） 蒙光（むこう）　佛教大学仏教学部教授

1975年愛知県生まれ。2011年佛教大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。専門分野は法然浄土教思想研究。東海学園大学人文学部・共生文化研究所講師、准教授を経て、2022年より佛教大学准教授、2026年より教授・仏教学部長。

著書・論文に『法然房源空述　逆修説法』（共著、佛教大学法然仏教学研究センター、2023年）、「法然における極楽浄土」（『共生文化研究』6、2021年）、「法然における現世の受け止め―病と現当二世の両益に注目して―」（『日本仏教学会年報』88、2024年）など。



あかねさす 図書館にて

歴史学部歴史学科准教授　水田 大紀

学者のみる夢

ノッケからで恐縮だが、図書館が欲しい。ギブ・ミー・図書館。できれば成徳常照館（紫野図書館）くらい、大きめの。なぜか。これは理屈ではない。図書館をもらうことは、あらゆる文系研究者の夢である。例えばある日、見知らぬお金持ちからいわれるのだ。「毎日、お仕事を頑張ってくれてるからね。ご褒美に何かかなえてあげよう」と。素晴らしい。もう図書館一択である。問題はそんなお金持ちに心当たりが全くないことだろうか。

さて、図書館をもらったら何をするか。もちろん、本を並べよう。研究室で書棚に入りきらずに平置きになってしまっている書籍や史料、印刷物などを片っ端から並べまくってみせる。紫野図書館ほどの広さがあれば、あの本もこの本も納められよう。非常にワクワクである。

とはいえ、そもそも図書館とは何なのだろう。研究者たるもの、「夢」の一言で片づけてはならない。こういうときは辞書を引いてみよう。実は本業はイギリス史の研究者なので、ちょうど手が届くところに、林望『**大増補新編輯イギリス観察辞典**』（平凡社ライブラリー、一九九六年［初版一九九三年］）があった。開いてみると「図書館」の項に、ケンブリッジ大学図書館の名物男の話が載っていた。良い図書館にはそういった奇妙な、しかし確かに「名物」といえる人物が付きものである。故事に曰く、図書館を得んと欲するなら、まずは「名物」で居よ。つまり図書館が欲しいなら、自身がその図書館の「名物」になればいいのである。目立つのは嫌だなぁ…。



ならば、他の辞書もみてみよう。同じく手元にあった三省堂の『**新明解国語辞典【第七版】**』（二〇一二年）によると、「図書館」とは「図書・資料・フィルムなどを集めて保存する一方で、利用者に見せたり貸したりする施設」だそうだ。なるほど、図書館では本を見せたり貸したりしなければならないらしい。となると、もし図書館をもらえても、蔵書を「見せたり貸したり」しなくてはならないのか。しかし解説をよくよく読むと、「貸したり」の後に半角スペースが空いている。これはもしかすると、「図書」の項を担当した方も、図書館が本を他人に見せたり貸したりすることには疑問を持っていたということではないのか。となれば、本を貸さなくてもいいという選択肢も成り立ち得る。

辞書を読む

ところで、皆さんはどんなときに辞書を使われるだろうか。何かの言葉を調べたいときか。いや、それは誤りである。辞書を使うべきとき、それは「暇なとき」である。暇なときは辞書を読みふけるに限る。まだ高校生だった時分、授業に飽きるとよく辞書を読んでいた。何せ、辞書なら授業中に読んでいても、教師から注意されることはない。当時の私がお気に入りだったのは、旺文社の『**古語辞典**』と大修館書店の『**漢語林**』で、古語や漢字の意味・用例を読むのが楽しかった。辞書読み界隈では、先ほどの『新明解 国語辞典』も人気銘柄だったはずだ。

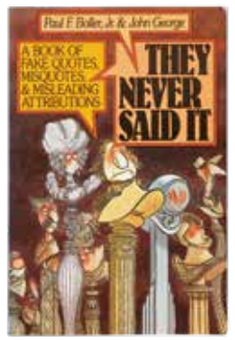
ただ高校時代に親しんだのは、国語科目の辞書だけであった。イギリス史を専門にした関係で今は英文も読んではいるが、だからといって英語が好きだったわけではない。実際、未だに英語は苦手である。そんな私に、英語にも面白い辞書の世界が広がっていることを教えてくれたのが、加島祥造の『**英語の辞書の話**』（講談社、一九七六年）と『**新・英語の辞書の話**——**引用句辞典のこと**——』（講談社、一九八三年）（現在は『**引用句辞典の話**』（講談社学術文庫、一九九〇年）である。両書では同義語辞典やスラング辞典など、さまざまな種類の辞書が紹介されるとともに、それぞれのエピソードや使い方の妙が示されている。おかげで両書を読むと、いろいろな辞書が欲しくなってくる。私は別に辞書マニアではないが、それでも数種類の英語引用句辞典が研究室に並んでいるのは、確実に『引用句辞典の話』のせいである。

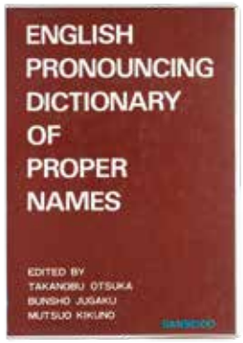




なんせ辞書の世界は奥深い。まだまだシロウトの私からみても、界隈はかなりディープである。例えば私が好きな引用句辞典の一冊に、Paul F. Boller & John George, ***They Never Said It: A Book of Fake Quotes, Misquotes, & Misleading Attributions*** (New York & Oxford, 1989) がある。これは「誰もがその人が言ったと思い込んでいるけど、実際には違っている引用句」の辞書である。例をあげれば、ガリレオ・ガリレイやマリー・アントワネット、アドルフ・ヒトラーといった世界史の教科書でみたことのある人物から、シャーロック・ホームズのような架空のキャラクターまで、彼らの「名言」が本当のところも交えて紹介されている。

もし皆さんのなかで、これから界隈に属してみたいと思っている方がおられたら、歓迎したい。常々考えるのだが、もしそういったビギナーの方に「何か推し辞書（ディク）はありませんか」と尋ねられたら、何を紹介すべきだろうか。例えば、大塚高信（他共編）『**固有名詞英語発音辞典**』（三省堂、一九六九年）はどうだろう。これはある意味、「読めない」辞書である。なんせ発音記号しか書かれていない。要するにこれは、英語圏の地名や人名といった固有名詞を正確にカタカナ表記に起こすためのもので、イギリス文化に関する研究をする人間には必携の辞書である。ただし発音記号が読めないと、何が面白いのか、チンプンカンプンになるので注意されたい。





このように、英語辞典にもいろいろな種類がある。せっかく図書館がもらえたなら、高価で、しか

も場所を取るせいで普段は購入を控えていた大辞典クラスも置かせてもらおう。例えば***The Oxford English Dictionary***。これは英語圏の研究をしている人間にとってはなくてはならない、ある意味で「最強」の英語辞典である。全一二巻。補遺もでている。この辞書では、目当ての単語の語源や初出、用法の歴史的変遷などを調べることができる。語彙以上に興味をそそるのが、辞書が作られた際のエピソードである。どの辞書でも、その出版背景や編著者たちの「物語」などを知れば、さらに楽しく読めるようになるものだ。例えば、あなたが辞書で意味を調べようとした項目は、今の私のように、執筆者が虚ろな目をして「原稿があがらないんだ…」とつぶやきながら書いたものかもしれない。英語辞典を作る際の苦労話が





知りたい方は、忍足欣四郎『**英和辞典うらおもて**』（岩波新書、一九八二年）や、本田毅彦『**大英帝国の大事典作り**』（講談社選書メチエ、二〇〇五年）などをどうぞ。

英語関係の辞書を中心に話をしてみたが、何も英語辞典だけが辞書なのではない。研究をする際、研究者は当該分野の様々な辞書や参考書、いわゆる工具書を使っている。なかにはかなり特殊な分野の辞書も数多くあって、まだまだ界隈は未知の辞書で溢れかえっている。きっと私の図書館も辞書塗れになるだろう。

図書館はヒトの縁でできている

さて、ここまで自分の研究そっちのけで話をしてきた。もう手遅れかもしれないが、そろそろ研究と図書館との話もしないと紙幅が

足りなくなってしまう。「ない袖は振れない」と聞く。なら、振れるうちに振っておくべきだろう。しかし何から話したものか。まず研究を進めるうえで、図書館の職員さんたちとの関係はとても重要である。その点、紫野図書館の職員さんたちは親切で親しみやすく、いつも柔軟な対応を心がけてくださる。今回の依頼とて、「僕に任せると、原稿が「図書館とYシャツとタワシ」になりますよ」といったら、返信は「楽しみにしてます」だった。対応の柔軟さだけでなく、ノリの良さも折り紙付きである。おかげで執筆を断れなくなった。

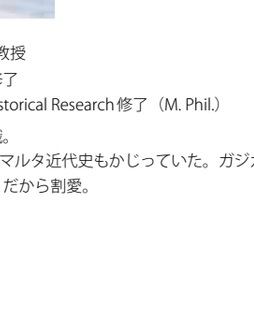
そんな職員さんたちがいてくれるおかげで、こちらも遠慮なく、いろいろお願いすることができている。特にありがたいのは、学外との交渉事である。コロナ禍以降、自身の研究に国内にある史料を活用する傾向が強まった。例えば他大学の図書館が所蔵する史資料を閲覧したいとき、職員さんたちに紹介状を作成してもらったり相手方に話を通してもらったりする。この間も史料の閲覧に神戸の

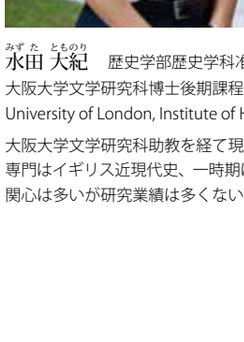


方まで遠征したが、図書館到着後、作業がとてもスムーズに進められたのは職員さんたちの根回しのおかげである。どちらかといえば、その大学に到着するまでの方が、道が分からなくて手間取ったくらいである。

また取り寄せをお願いする際にも、日本の史料が国会図書館でデジタル化されていたりすると、それを教えてもらえる。「昭和初期の座談会に出席した人物が研究対象の同僚だったかを確認したいので、記載があるかどうかも分からないけれど、座談会記録で出席者の肩書が書いてある頁があったら、それを印刷して取り寄せて欲しい」などという無茶ぶりにも応じてくれる。研究のためとはいえ、こんな要件ばかりをもってくる人間は忌避されても仕方がな

暑くなると読みたくなる池谷和信『**人間にとってスイカとは何か――カラハリ狩猟民と考える**』（臨川書店、二〇一四年）や、タイトルをみただけで無視できなくなる山下泰平『**「舞姫」の主人公をバンカラとアフリカ人がボコボコにする最高の小説の世界が明治に存在したので二〇万字くらいかけて紹介する本**』（柏書房、二〇一九年）、ドードーが幕府への献上品として出島にやってきていた可能性を探る過程がスリリングな川端裕人『**ドードーをめぐる堂々めぐり――正保四年に消えた絶滅鳥を追って**』（岩波書店、二〇二一年）なんかの話もしたかった。しかしこのままではキリがないし、オチもつかない。好き勝手書いてきたからそろそろ職員さんの目も怖い。だから野守に見つかる前に、このあたりで稿を閉じた方がよいのだろう。

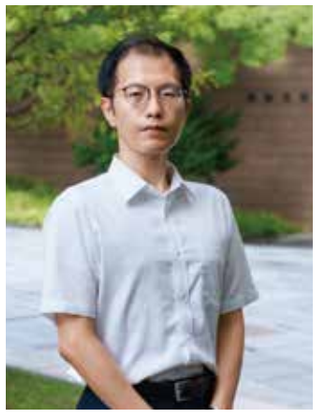






むすび

今回は、図書館と研究とそれに関連する本について書くという依頼であった。もし研究と関係ない本の話もしてよかったなら、毎年



水田（みずた） 大紀（とものり）　歴史学部歴史学科准教授
大阪大学文学研究科博士後期課程修了
University of London, Institute of Historical Research 修了（M. Phil.）
大阪大学文学研究科助教を経て現職。
専門はイギリス近現代史、一時期はマルタ近代史もかじっていた。ガジガジ。
関心は多いが研究業績は多くない。だから割愛。

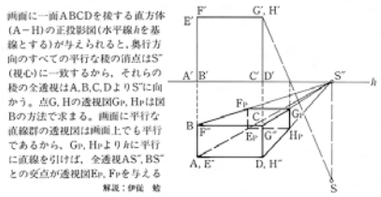
「透視画」の流行について

―江戸（中・後期）の日本と清末中国の場合―

中国学科　若杉 邦子

はじめに――「透視画」と「透視図法」

「透視画（透視図）」は、目に見える形に近い図を平面上に描くために生まれた、幾何学的図法による図画であり、投影図のひとつである。ここでいう幾何学的図法とは「透視図法」と呼ばれるものだ。三次元空間の奥行き構造を、キャンバスなどの二次元平面上に表現するための描画手法であり，無限遠となる点＝消点（消失点ともいう）を描画平面上に一～三点置き、そこに向かって収束する直線（投射線）を描くことで、視覚でとらえた立体の情報を、平面上にリアルに再現することが可能となる。【図一：透視図（消点法）】



図一：小学館『日本大百科全書（ニッポニカ）』JapanKnowledge, https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001081306024012754,（参照 2026-08-01）

彼らにとっての透視画（透視図法）が、いまだかつて見たことのない、珍奇な舶来品（舶来技法）であったことは疑いを容れない。この事実に基づき、江戸人、もしくは清末人の目に映じたであろう「透視画なるもの」について、少々想像を膨らませてみたい。おそらく、透視画（透視図法）の持つ不思議さは見る者たちを驚かせ、その好奇心を刺激してやまなかったのではあるまいか。

「目で見た景色を、あたかも実物のごとく、平面上に再現しうる」という未知の図法が、衝撃的な視覚体験を世上にもたらしたであろうことは容易に推測できる。そしてこの推測を補強するかのごとく、江戸中・後期の日本、および清朝末期の中国には「透視画をめぐる一大ブーム」の巻き起こった形跡が認められる。

この「透視画ブーム」は当時、その魅力の虜となった人々の、興奮と熱狂を雄弁に物語る現象であったと考えられよう。そこで拙稿は、この透視画ブームの一端について、江戸（中・後期）の日本と清末中国の事例に焦点を当てつつ、紹介を試みるものである。

江戸中・後期の日本における「透視画」の流行

まずは日本における「透視画ブーム」の話から始めたい。そもそも日本に透視図法が伝わり、それが絵師たちによって実践され始めたのはいつ頃のことだったのだろうか。井村俊一は「透視図法の歴史についての一考察」（２０１０）で次のように述べている。

> 十六世紀の中頃、フランシスコ・ザビエル（生没年１５０６年-１５５２年、日本での活動期間は１５４９年-１５５１年…若杉注）が日本に伝えたものとして線遠近法（本稿で言う「透視図法」と同義…若杉注）で描かれた絵画があり、それが日本での遠近法伝来の始まりという説があるが、当時の絵師達にとって、はじめて見る線遠近法の構図の絵の意味が十分に理解ができなかったと考えられる。…（略）…日本での線遠近法の本格的展開は、江戸時代での眼鏡絵、浮絵から始まると考えられる。(1)

眼鏡絵とは、透視図法で描かれた風景画、または広壮な建築の室内描写であり、鑑賞の際に凸レンズを通して見る浮世絵（江戸時代に盛行した庶民的な絵画）の一種であった。そうした仕組み上、左右逆像で描かれた。「のぞきからくり」の箱の中に納めて前方の眼鏡からのぞく方式と，平面上に絵を置き，その上に四十五度の角度で鏡を設置し、その映像をさらに凸レンズで拡大して見る方式とがあった。十七世紀に欧州で流行し、十八世紀前半に中国を経て日本に伝来したという（オランダ伝来のものもある）。眼鏡絵の流行は日本人の視覚の働きを庶民レベルから大きく変えることとなった。(2)【図二：司馬江漢（１７４７-１８１８）「三囲景」（国立国会図書館所蔵）】



図二：https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001081306024015743

浮絵は、西洋の透視図法を取り入れた遠近感のある絵を指す。実景が浮き出るように見えるので「浮絵」と呼ぶのである。初めはのぞきからくりの眼鏡絵として用いられたが、その後、芝居小屋の内部や風景などを立体的に描き、浮世絵における一つのジャンルとして確立した。(3)基本的には凸レンズを使わず肉眼で見る。眼鏡絵と同じく、浮絵も十八世紀前半に日本に伝来し、流行した。【図三：歌川豊春（１７３５-１８１４）「浮絵　御大名行列之図」（国立国会図書館所蔵）】



図三：https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001081306024014359

以上の事柄から推し測るに、日本における本格的な透視図法の開始と普及は、これら「眼鏡絵」や「浮絵」の伝来・流行の開始（十八世紀前半以降、つまり江戸中期）と、ほぼ重なっていたと考えられよう。

実はもう一つ、清代に蘇州の桃花塢（とうかう）で刷られた版画が、西洋の絵画技法を採り入れたものであり、それが長崎経由で日本に伝わり、浮世絵に影響を与えたという別ルートも存在した。ただしこちらもまた十八世紀前・中期の出来事であり、「眼鏡絵」「浮絵」の伝来と時期的にほぼ一致するので、ここでは指摘するにとどめておく（後ほど「清末の流行」について述べる段で再度触れる）。

フランシスコ・サビエルによる透視図法の最初の伝来が十六世紀半ばであった点を考慮すれば、その受容には約二世紀（約二百年）の時間を要したことがわかる。引き続き井村の説明を見ていこう。

> しかし、眼鏡絵については…（略）…厳密に描き、装置にかけて見るとすごい迫力で視覚に迫る。それ故、見世物小屋の出し物にもなった。一説によれば、平賀源内（１７２８-１７７９…若杉注）が西洋絵画に興味を持ち、写実性、線遠近法の描き方を研究し、自身も描き、小田野直武、佐竹曙山らに広めたといわれている。また、円山応挙、奥村政信、歌川豊春、司馬江漢など、線遠近法の理論的理解の程度は不明だが、陰影法と共に図法として習得し、眼鏡絵や浮絵を描いている。(4)

この説明によれば、眼鏡絵や浮絵の普及を通じて、大衆による透視画の受容も急速に進んだようである。透視画が十八世紀の江戸の市井に浸透した結果、名立たる浮世絵師たちは競うようにこのジャンルの制作に励むようになった。今、私たちが見ることのできる浮世絵の中にも、たとえば、奥村政信（１６８６-１７６４）の「芝居狂言舞台顔見世浮絵」【図四】や、円山応挙（１７３３-１７９５）の「三十三間堂通し矢図」【図五】、葛飾北斎（１７６０-１８４９）の「新板浮絵浦嶌龍宮入の図」(5)や、歌川広重（１７９７-１８５８）の「東都名所・吉原仲之町夜桜」(6)等々、少なからぬ名品が存在してお

り、枚挙に暇のないことがわかる。それはつまり、江戸中・後期の社会に「透視画の一大ブーム」が訪れたことの有力な証左と言ってよかろう。

さて実際のところ、一部の限られた人々を除き、江戸（あるいは明治初期）に透視画を描いた絵師たちの多くは、厳密な透視図法にはそれほどこだわっていなかったと思しい。

西洋絵画の知識から、安藤広重、奥村政信、葛飾北斎、等の絵に線遠近法の図法が見られるが、消点など、図法として厳密ではなく、構図の必要性があれば、躊躇なく線遠近法の構成を無視した自由な展開が加味されている。即ち、一点透視の消点が収束していない。(7)

前述の作品も含め、江戸の中・後期から幕末・明治にかけて制作された透視画の実作例をあらためて見直してみるに、厳密な透視図法に則して描かれた作品も混じってはいるものの、大多数は理論面にさほどこだわらぬ、雰囲気重視・理論軽視の作品群であったことに気付く。しかしながら、この理論軽視の姿勢から、江戸（と明治）の絵師たちの、透視画に対する熱意を疑うことは早計であろう。なぜならば、絵師たちの胸中に透視画への熱意がなければ、それらが量産される事態もまた、生まれるはずがなかったからである。

十八世紀中葉頃、江戸の絵師たちが透視図法の修練と制作に力を注ぎ始めたその結果、透視画の佳作が大量に生み出されるという現象が起きた。「描く者の情熱」と「それを見る者の好奇心」、この両者こそが、江戸の中・後期に勃興した一大透視画ブームの熱源であったと言えるであろう。

清朝末期の中国における「透視画」の流行

では、中国における透視画の受容・普及・流行といった現象は、いつ頃始まったのであろうか。日本への眼鏡絵の伝来は、中国（清朝）経由の現象であったと先ほど述べた。そうであるならば、中国における透視画の始まりもまた、日本と同様に、眼鏡絵の（西洋からの）伝来と普及を契機とするものであったのか。

上記に対する答えは否である。眼鏡絵は確かに西洋から清代の中国へと伝わり、その後日本に渡り、日本においては前述の「一大透視画ブーム」を巻き起こしたのであったが、中国では、江戸中期の日本で勃興したような「眼鏡絵の社会的な流行現象」は起きなかったようである。

結論から言えば、中国における透視図法の本格的な受容は、日本とは別ルートで開始された。もちろん、透視画をめぐる日中の事情には、ある程度の類似性が認められる。板垣俊一が「遠近法絵画と覗き見の装置――現実の風景はどのようにして絵になったのか――」（２０１１）で

東洋絵画の写実的描法は、大航海時代におけるヨーロッパの海外進出とともにイエズス会によるキリスト教の布教活動にともなってもたらされた西洋絵画によっている。中国では十六世紀末にマテオ・リッチ（生没年１５５２年-１６１０年、中国での活動期間は１５８２年-１６１０年…若杉注）がもたらした絵が西洋画法との出会いだったと言われるが、しかし中国の文人画家たちは中国絵画の伝統を捨てなかった。(8)


図四：文化庁「文化遺産オンライン」https://online.bunka.go.jp/heritages/detail/445843


図五：文化庁「文化遺産オンライン」https://online.bunka.go.jp/heritages/detail/401818

と記したとおり、中国に西洋図法がもたらされたのは十六世紀の末であり、日本への西洋図法の伝来（十六世紀中葉）から、時期的にみてそう遠くなかったことが窺える。また、日中における西洋図法（透視図法を含む）の受容にイエズス会の関与が共通して見られたことや、伝統を重んじる中国の絵師たちが、西洋の図法をすぐには受け入れようとしなかった点に関しても、日中両国の状況はそれなりに似通っていたことが了解される。

上述の類似性や共通性が確かに存在していたにもかかわらず、西洋の新技法を受容するまでの時間という面では、日中間で大きな差異が生じた。日本の場合、透視図法の受容に約二百年を要した旨を先ほど指摘したばかりであるが、中国の場合はその程度では済まず、西洋図法の本格的な受容には実に三百年もの時間を要した。前段（「江戸における流行」）で軽く触れたとおり、蘇州の桃花塢版画において、透視図法を含む、西洋技法の吸収がすでに行われていたにもかかわらず（十八世紀）、西洋画の影響は部分的なものに止まり、社会全体にまではなかなか広がらなかったのである。

こうした結果に至った理由は明白である。すなわち、「（絵画に限らず）自国の伝統を最上とみなす、中国の根強い価値観」が、西洋図法の吸収を阻み続けたためであった。日本人絵師たちにも、自国の伝統図法に対する誇りはあったものの、それは、中国人絵師たちにおける「自国文化第一主義」の絶対性には、到底及ばなかったということだ。板垣が前掲論文で

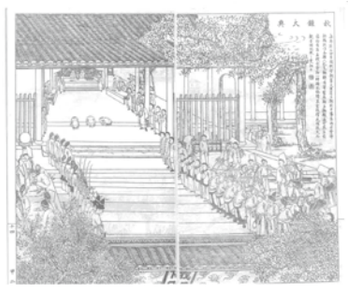
十八世紀の中国の画家たちは、陰影法や透視図法による遠近法的空間構成をよく理解していた。しかしそれは「画工」の技術的な仕事に過ぎないとおとしめている。(9)

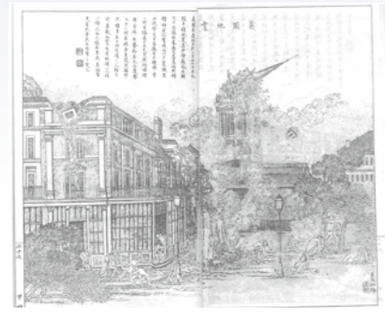
と指摘したとおりである。結果として、中国における本格的な西洋図法の吸収と普及は、日本におけるそれ（十八世紀中葉）より、さらに百年ほど遅れることとなった。

中国で透視画の大流行が起きたのは、清末１８８４年以降、つまり十九世紀の末である。その立役者は呉友如（生年不詳-１８９３年没、本名嘉猷、江蘇省元和県すなわち蘇州出身）という絵師であった。彼は「十里の洋場」と呼ばれた租界・上海で、新興メディアの一つである画報の制作にいち早く携わり、甚大な影響力と名声を獲得した人物だ。(10)呉友如の画名を一躍高からしめた画報は、その名を『点石斎画報』【図六】（「点石」は石版印刷を指す）という。ニュース画報の『点石斎画報』が評判を呼び、飛ぶように売れたことにより、それ以後、同種の画報が中国国内で次々に刊行される流れが形成された。そして、同報に掲載されていた夥しい数の透視画もまた、世の注目を浴びるに至ったのである。実はこれこそが、清末中国における「透視画の一大ブーム」の正体であった。


図六：広東人民出版社、影印、1983年6月、若杉所蔵

『点石斎画報』は、イギリス人の元茶商アーネスト・メイジャー（Ernest Major、１８４１-１９０８）が経営する申報社によって、１８８４年5月に創刊され、１８９８年に停刊された、旬刊の画報である。呉友如は創刊時から１８９０年までこの画報に関与し、同報の方針や画風を決定付ける役割を果たした。同報は石版印刷技術（リトグラフ）で刷られ、毎冊、原則として八葉九図で構成された。記事は白話まじりの文言文で綴られ、内容は政治・経済、文化・習俗、国内外の大きな話題から市井の小さな伝聞まで、実に多岐に及んだ。全四四集、計五二八冊から成る同報上のニュース画は四七〇〇余枚に上り、先述の


図七：「秋録大典」


図八:「英国地震」


図九:「銀行倒閉」

とおり、中には多くの透視画も含まれていたのである。【図七、図八、図九、いずれも『点石斎画報』甲集所収】

『点石斎画報』のニュース画はすべて、主編画師たる呉友如をはじめとする、点石斎に集った中国人絵師たちが描いていた。さて、ここでひとつの疑問が生じる。彼らはみな中国人であったにもかかわらず、いったいなぜ、(彼らにとっては)「最上」であったはずの中国の伝統図法を一旦脇に置き、西洋画の技法を積極的に採り入れるという、当時としてはきわめて異例の挙動に及んだのであろうか。

その理由として最初に挙げるべきは、やはり、彼らのリーダー格であった呉友如の標榜する、徹底した「依頼人第一主義」の影響であろう。メイジャーから点石斎に呼ばれる前に、呉友如はすでに「なんでも描ける器用な絵師」としての評判を獲得していた。(11)呉友如にしてみれば、伝統的な中国の図法はもちろん大事であったものの、しかしそれ以上に、イギリス人のメイジャーという「依頼人」の要求に柔軟に応えてみせることこそが、彼のプライドの第一の在処であり、最重要課題だったのではあるまいか。

メイジャーからの注文内容は「西洋画のような、徹底的に写実にこだわったニュース画を描いてほしい」というものであった。(12)そこで呉友如は、自分なりに西洋の透視図や陰影法などを学び、結果としてメイジャーの期待に十分に応えてみせたのである。

ただし呉友如と、その後に続いた点石斎の絵師たちの作画にしても、理論面にはこだわらない雰囲気重視、理論軽視の傾向が圧倒的に強かった。その点もまた、江戸の透視画の事情と非常に似通っていたと言えるであろう(依頼人のメイジャーが納得しさえすれば、それで良かったのかもしれない)。

ところで、洋画技法の採用に躊躇しなかった第二の理由として、前述の、桃花塢版画が影響した可能性についても、触れておかねばならないだろう。なぜならば、呉友如は蘇州出身の絵師であったから、桃花塢版画についても当然熟知しており、その分、他の場所の絵師たちよりも、西洋技法の吸収に対する抵抗感が少なかったのではないか、と考えられるためである。

つまり、「依頼人第一主義」と「桃花塢版画の知識」という二つの要素により、呉友如は(西洋の図法を取り入れた)「洋風のニュース画路線」を敷くとの勇断を下し得た可能性が大いにある。それが結果的に大好評を博し、呉友如と『点石斎画報』は名声を得て、透視画の評価もおおいに高まるに至った。そうとなれば、彼の後に続いた他の絵師たちも、ためらうことなく西洋の図法の習得と実践に一層励んだであろう様子が想像される。

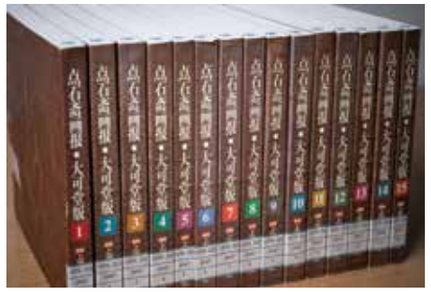
絵師たちは一枚一枚の絵図に自らの名を署し、自負をもって作画の出来を世に問うた。そうした創意と新味が功を奏し、呉友如が『点石斎画報』を離れた後も、同報は多数の読者を引き付け続け、清末の「透視画ブーム」はしばらく存続したのであった。

おわりに

以上、拙稿では江戸中・後期の日本と、清末中国に巻き起こった「透視画ブーム」について、紹介と比較を試みた。

『点石斎画報』ここでは(『点石斎叢画』も含める)の版本は多数出版されており、佛教大学の図書館は以下の版を所蔵しているようだ。


図十:『点石斎叢画』十巻、点石斎(上海)、一八八五年


図十一:『点石斎画報』大可堂版、上海画報出版社(上海)、影印、二〇〇一年九月

(参照 2026-06-03)

(4)同注(1)

(5)文化庁「文化遺産オンライン」https://online.bunka.go.jp/heritages/detail/487614

(6)文化庁「文化遺産オンライン」https://online.bunka.go.jp/heritages/detail/410804

(7)同注(1)

(8)板垣俊一「遠近法絵画と覗き見の装置――現実の風景はどのようにして絵になったのか――」、『国際地域研究論集(JISRD)』No.2所収、二〇一一年

(9)同注(8)

(10)楊逸『海上墨林』、一九一九年

(11)同注(10)

(12)アーネスト・メイジャー「点石斎画報縁啓」、一八八四年

・『点石斎叢画』十巻、点石斎(上海)、一八八五年【図十】

・『点石斎画報』大可堂版、上海画報出版社(上海)、影印、二〇〇一年九月【図十一】

・『点石斎叢画』上・下、国家図書館分館文献開発中心編、国家図書館古籍文献叢刊(清末民初報刊図画集成1、2)、全国図書館文献縮微複製中心(北京)、影印、二〇〇三年七月

・『図像晩清点石斎画報』陳平原・夏暁虹編注、東方出版社(北京)、二〇一四年八月　※他の史料と画報の記事を対照したもの

機会があればぜひ手に取って、清末中国が受容した「新しい立体的世界像」を、しばし体感して頂きたい。

注釈

(1)井村俊一「透視図法の歴史についての一考察」、『金沢美術工芸大学紀要』No.54所収、二〇一〇年

(2)平凡社『世界大百科事典』、項目「眼鏡絵」、JapanKnowledge, https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1020007530800 (参照 2026-06-01)

(3)小学館『デジタル大辞泉』、項目「浮絵」、JapanKnowledge, https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001001407800


図十二:『呉友如画宝』、(1908年上海瑞桜書局初版)世紀出版集団・上海書店出版社、影印、2002年1月、杉所蔵

若杉邦子(わかすぎくにこ)　佛教大学文学部中国学科　准教授
九州大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学

専門分野
中国近代史、中国近代文学

研究課題
戊戌変法運動に関する研究
中国近代の画報に関する研究

未知の世界への出発点としての図書館

―研究という冒険とフィールドワーク―

社会学部公共政策学科　水上 象吾



■大学生の頃の図書館の使い方

大学学部生時代、講義の合間やお昼休みには、キャンパス中央のケヤキに囲まれた噴水のまわりで、私は同級生の友人らとよく集っていた。

噴水の隣に建っていた大学図書館には、正しい使い方ではなかったと思うが、雨が降れば雨宿りし、夏の暑さや冬の寒さをしのぐときに踏み入れた。試験期間になると図書館は混んで、そこで出くわした丹念に授業ノートを取っていた同級生に写させてもらったこともあった。しかし、多くの場合は試験対策や準備をするわけでもなく、同じく何もしない友人らと雑談して過ごした。現実逃避しながらも、勉強しなくてもなんとかなるんじゃないかと互いに確認し合って不安を和らげていたのかもしれない。

■陳君の思い出

大学では同じサークルの同級生に、中国の福建省から留学していた陳君がいた。陳君は温厚な人柄で、いつもにこやかな笑顔で接してくれた。私が陳君を冗談ながらに「ちんちん～」と呼ぶと、留学生である陳君も、日本語のその意味を理解してくれて、笑いながら「ダメだよ～」とたしなめてくれた。

学部4年生になると友人のほとんどは就職活動を始めた。私は大学院に進学することを考え

志を持って夜遅くまで勉強し続けていたのだ。

郷や応援してくれた方々のことも背負い、強い

士で「つらい、ひどい、くるしい」とぶーぶー文句ばかり言っていた。

そんな学科に所属し、卒業研究にとりかかる4年生になって、研究テーマに迷った。当時、森林浴がはやり、樹木から発散されるフィトンチッドという揮発性物質がリラックス効果やストレス軽減につながるという考えが広く紹介されるようになっていた。私は、所属研究室の指導教員に安易にも「フィトンチッドの研究をしようと思います」と伝えたところ、「そんなものを測定する機器はない」と一蹴された。置かれた環境や自身で実行可能な方法を検討し、工夫しながら自らが研究を進めなければならないことにようやく気づいた。

研究データを集める調査方法について、所属学科の先生の何人かは「学生は足で稼げ」と仰った。「アンケートやヒアリング調査に頼るのは生意気だ」と。それはこういうことだったのだろう。学生は自らのテーマについてもまだ知識が足りておらず、問題意識が形成されていない。その段階で安易に人に尋ねると、調べれば分かることまで質問してしまう。相手の知識を教えてもらうことが目的になってしまう。しっかりと調べた上で問いを深めなければならない。そして学生は、調査協力者の時間や負担に対する配慮が十分でない。人に迷惑を掛けないようにしなければならず、まずは歩いて観察してデータを得る方法を選ぶとよい。

■卒業研究と調査方法

私が所属していた自然環境学科は、農学、生物学、地学などの出身の教員で構成されており、授業ではフィールドワークが多かった。普段の座学の授業でも、先生が「今日は天気がいいから散策しよう」と提案され、広い学内キャンパスを先生の後ろに数十人の学生がぞろぞろとついて回ったり、キャンパスの外まで崖線の地形を見に行くことなどもしばしばあった。

実習系の科目では、生物の解剖、地学実験や野外実習が必修だった。東京に立地する大学だったので、上野の不忍池で行われる水鳥個体数調査に参加させていただいたこともあったが、自然環境を学ぶために授業で遠くに出かけることも多かった。週末には三浦半島の先端の城ヶ島まで地層を観察しに出かけたり、夏休みには山梨県や長野県の山中で合宿を行った。ホテルや合宿所ではなく、キャンプである。テント、寝袋、飯ごうや数日分の食糧を入れると25kgもの重さになる登山用ザックを背負って歩いた。現場では何かを教えられるということもなく、ひたすら歩く。現地を自らの肌で感じ五感で読み取る、というフィールドワークの基礎に重きを置き実践していた授業だったのだろう、と今になって思う。水道も風呂もないので川で顔や頭を洗い、先生に隠れては学生同

るようになり、専攻する分野の本を大学図書館で少しずつ借りて読むようになった。授業は少なくなり友人に会うことも減り進路も異なり、少し孤独感を覚えていたかもしれない。

その頃、図書館に行くと、陳君によく会った。あるとき夜遅くに立ち寄ったときにも、陳君が机に向かっている。「いつも勉強しているの？」とたずねたら、陳君は、しっかり学んでいつか母国に帰って貢献するんだというようなことを話してくれた。陳君はどちらかといえば小柄なほうで、優しい性格も手伝ってかほんわかした雰囲気だったけれど、その時、陳君の話を聞いて、彼の姿が大きな岩のように見えた。

90年代後半だった。日本のバブル経済がはじけた後、一般の人々に不況として実感されるまでには時間的なずれがあったけれど、すでに景気が悪いことが一般に認識されていた。しかし、会社の倒産が増えていることがニュースで流れていたものの、社会に出ていない大学生には他人事だった。

当時は、大学生と言えば「遊んでばかり」という認識が社会には広くあり、実際にそうであったと思うし、少し前までの就職の「売り手市場」の印象がまだかすかに残っていた。学内でも学生はのんきに過ごしていた。就活を始めてやっと就職が著しい勢いで厳しくなっていたことを実感し、口々に「自分はいったいどうなるんだ！」と話していた。

陳君はその頃、自分のためにだけではなく故

のは手間も時間もかかった。何度か赴いたところで、自然豊かな地域に立地する大学の学生にはかなわない。他大学に通う友人からは、その大学は東京にあれども、全国に演習林を持ち、調査・実験を行う条件が揃っていると聞いた。

自分が研究したいテーマと目的と調査方法と、自分ができることとできないこと、他の人はできること。いろんなことが入り交じって悩んだ。自然や環境に関する論文を探して読んだ。私の通う大学図書館には置いていない学術雑誌も多く、他大学の図書館まで通った。

あるとき、ヨーロッパ風景画の中に描かれた景観構成要素がどのような割合や配置になっているのかを分析した論文を見つけた。それまで、絵画とは鑑賞するアートであり、理性的な科学や研究とはほど遠い感性の世界にあるものと思っていたから、分析対象になり得ることに驚いた。そして、環境というものを視覚的に捉えた景観を分析するという視点や、ここに居ながらにして遠くの環境を捉えられるという風景画は、野外での調査を前提に考えていたものの実行しにくかった私にとって、世界が開けたように感じた。

その後、それまでに大学図書館で借りた本から得ていた「都市化により人々の自然を求める意識が高まってきたこと」等の知識が研究テーマにつながり、江戸時代に歌川広重が描いた名所江戸百景と、現代に描かれた新東京百景の絵画の景観要素を比較することに決めた。絵画からは、時間を超えて昔の環境も知ることができるぞと思った。自然が豊かであった江戸時代は名所に人工的環境が描かれ、都市化が進み自然が乏しい現代の東京では名所に緑豊かな場所が選ばれ描かれるという仮説を立てた。

それからは、画集の置かれていた都立中央図書館に通った。それぞれ100枚程ある江戸百景と新東京百景の画に5mm間隔で格子状に線を引いた透明パネルを重ね、緑、水域や建造物などの景観要素をカウントした。

テーマ決めに数ヶ月かかってしまったので、データを集め始めたばかりなのにすでに秋になっていた。しかし、焦りはなかった。自分なりのテーマを見つけられた喜びと目標が定まった安堵感ゆえか、終わってもいないのにすがすがしい気持ちになり、図書館に向かって広尾の坂道を上った記憶がある。もちろん、その後もうまくいかないこと、試行錯誤が続くのではあったが。提出日ぎりぎりになんとか卒業論文を完成することができた。



『広重名所江戸百景 秘蔵岩崎コレクション』
［歌川］広重［画］ 2007.8出版

■大学院・ポスドク時代と『ホームレス中学生』

卒論で都市の自然をテーマにしたこともあって、私は都市学に興味を持ち、他大学の大学院入試を受け、都市について学ぶ研究科に進学した。

修士論文と博士論文では都市における自然の評価をテーマとした。街の中にどのくらい緑があるのかを調べるために街路景観を数十メートルおきに数千枚の写真を撮影し、人々はどのくらい緑があったらよいと考えているかを一軒一軒、住民に聞き取りを行った。公園や人工的環境での鳥の種や出現数を調べるため双眼鏡を手に観察を続けたりもした。屋外での調査を伴う研究であったが、それでもトータルでは外に出ている時間よりも圧倒的に屋内で文献や論文を読む時間が多かった。

博士課程修了後のポストドクター時代には、京都の鴨川の景観評価をテーマとし、東京から京都を何度か訪れ川沿いを歩いた。人々が鴨川という環境をどのような場と認識しているのかを調べたかったが、京都に長く滞在することやアンケートを実施することが難しいこともあり、雑誌「月刊 京都」の『読書だより』に記された鴨川の言及内容を調べた。16年分、192冊を対象としたが、購入できたバックナンバーには限りがあった。図書館のデータベースを調べると、京都市内の図書館には揃っているところも多いのだが、東京ではとある大学に唯一所蔵されていた。その大学図書館の地下書庫に数日通い、言及内容を書き写したりコピーした。

非正規雇用のポスドク時代には終わりが見えなかった（正規雇用の就職ができなかった）。毎年、更新が切れてポジションを確保することもままならず、何とか仕事を取ってきてはあてがい、所属だけを確保した。

お先真っ暗感のせいか、出口の見えないトンネルや洞窟を歩き続ける夢を何度も見た。窮屈な宇宙船に乗り込み暗黒の宇宙を漂う夢も見た。夢には夜のシーンが多く閉塞感があった。それゆえ、現実世界でも大学図書館の地下深くの書庫に長くこもっていると息が詰まりそうになった。

図書館に一番お世話になったのは、この大学院生時代とポスドクの頃だ。アルバイトをしながらの生活で本を数多く購入する余裕もなく、出かける余裕もなく、居住地域の市立図書館とコーヒーショップは私にとって日常の居場所になった。

市立図書館では、研究にかかわるような専門書は書庫に所蔵されていても、自由に閲覧可能な書架に置かれていないことが多い。申請して書庫から取り出してもらったが、回数が増えてくると、何度も図書館員に頼むのは気が引けた。専門書は書庫にあればまだよいほうで、市内の図書館にないことも多かったが、都内の他の公立図書館にあれば取り寄せてもらえた。とてもありがたかった。

しかし、専門書が都内の図書館に在ることを確認し取り寄せ希望用紙に記入していたら、壁の前に貼ってあった購入リクエストランキング1位がお笑いコンビ・麒麟の田村裕氏による自叙伝『ホームレス中学生』だった。当時のヒット作で、200万部以上ものミリオンセラーになった本だ。『ホームレス中学生』は、そのときらは、時間を超えて昔の環境も知ることができるぞと思った。自然が豊かであった江戸時代は名所に人工的環境が描かれ、都市化が進み自然が乏しい現代の東京では名所に緑豊かな場所が選ばれ描かれるという仮説を立てた。

それからは、画集の置かれていた都立中央図書館に通った。それぞれ100枚程ある江戸百景と新東京百景の画に5mm間隔で格子状に線を引いた透明パネルを重ね、緑、水域や建造物などの景観要素をカウントした。

テーマ決めに数ヶ月かかってしまったので、データを集め始めたばかりなのにすでに秋になっていた。しかし、焦りはなかった。自分なりのテーマを見つけられた喜びと目標が定まった安堵感ゆえか、終わってもいないのにすがすがしい気持ちになり、図書館に向かって広尾の坂道を上った記憶がある。もちろん、その後もうまくいかないこと、試行錯誤が続くのではあったが。提出日ぎりぎりになんとか卒業論文を完成することができた。

私の居住市内の図書館にはすでに44冊も！あった。確かに貸し出し待ちの人数はとても多く、それに比例したリクエスト数だったのだろう。専門書がタレント本と比べて高等なわけでもなんでもない。しかし、切羽詰まっていた当時の私は、「なんだかなあ、それ。」と思った。

当時は博士課程を修了しても就職できず「高学歴ワーキングプア」という言葉が生れた頃であり、「ホームレス博士」という言葉も後に言われ出した。「ホームレス中学生」は他人事ではなかった。

市民のための図書館はどうあるべきか、という議論はそれまでにもなされてきただろう。多くの人が望むベストセラーの娯楽書か？それとも少数のための専門書か？本の回転率も考えていかなければならないだろうから、いつ誰が借りるのか分からない専門書よりも、話題作が購入されるのは当然かもしれない。一方で、本に求められる「切実さ」なんていうものも加味できればいいのかなと思う。



田村 裕（著）『ホームレス中学生』
ワニブックス

■近年の研究における調査と図書館

近年の私の研究では、都市に空き地はどのくらいあり、繁茂した内部の緑が街路からどのくらい見えるのかを調査した。京都市内の3つの学区を歩いてまわり、空き地、田畑、墓地、駐車場といったオープンスペースを探した。また、空き地の囲いは柵やロープ等により見通せるのか、それとも板塀やブロック塀等により遮られているのか、囲障の種類を調べ高さを測定した。空き地の緑が見えることが地域社会に寄与するかを探るため、アンケート票6000部を調査地区の各戸のポストに配布した。もちろん、実地での調査前には、図書館で地域の資料を調べ、住宅地図を凝視し、念入りに場所や回遊ルートを確認した。

一昨年のお盆休みには、高知県立図書館に赴いた。環境モデル都市である高知県梼原町の環境イメージの変遷に関する研究をしていた。観光雑誌に紹介されている梼原町の名所の移り変わりを調べるため、バックナンバーを古本で買い集めていたが、発刊初期の古い巻号まで網羅することはできなかった。そのため、全巻保管されている高知まで足を運んだ。野外でのフィールドワークではないが、学部生時代の教えに従った「足で稼いだデータ」と言えると思う。


株式会社「関西地図協会」

■研究という未知の世界への出発点

図書館は書物が並びそれを読んだり勉強する施設であり、デスクワークの場として受け止められる。静かな環境で真面目なイメージがあると思う。一方で、フィールドワークは、屋外に飛び出し身体を使った実践的で活発なイメージがある。しかし、そのフィールドワークを行う際にも、必ず初めに立ち寄らなければ進めないのが、対照的なイメージを持つはずの図書館なのではないだろうか。

冒険ものの映画でも、その冒頭の描写には、図書館の歴史資料を手がかりに伝説を調べ始めたり、一冊の古書やほこりを被った古地図に謎が隠されていたりと、物語のきっかけになっていることが多いように思う。

研究とは、これまでにない新たな知見を探究する営みなので、未知の世界に挑む冒険にそのプロセスは似ているのかもしれない。アイザック・ニュートンも引用した「巨人の肩に乗る」という言葉が示すように、発見とは先人たちが築いた知識や成果の上に積み重ねられ、まだ誰も見たことのない景色を見通すことだ。そうであるならば、デスクワークにしてもフィールドワークにしても、研究というものが、先人たちの知識の宝庫である図書館から始まるのは当然なのだろう。

振り返れば私の学びと研究において、調べものをするだけでなく、心の準備から、ヒントを探すとき、困ったときに立ち寄るのも図書館だった。新たな出発のために、これからもお世話になるだろう。



水上 象吾（みずかみしょうご）　佛教大学社会学部教授

東京学芸大学卒業、東京都立大学大学院修了。博士（都市科学）。慶應義塾大学大学院特別研究助教を経て、2011 年から佛教大学へ。研究テーマは、都市における自然の創出と享受に関する研究。主な論文に「路地における鉢植えの緑の設置状況と居住者意識」（『環境情報科学学術研究論文集』、2013 年）、「都市の居住地域における空き地の効果と地域の共有領域との関係―京都市中心市街地の住民意識に基づく分析―」（『地域学研究』、2015 年）、「都市住宅地域のニホンヤモリに対する住民意識―身近な自然とのふれあいに関する考察―」（『地域学研究』、2022 年）、など。主な著書に『水と緑の計画学―新しい都市・地域の姿を求めて』（京都大学学術出版会、2010 年）など。

NEW OPEN

学術研究と知の探求を支える新しい学習・研究空間

二条キャンパス 2号館 図書室

6階　入退館ゲート



総合カウンター



⬆貸出・返却手続きや、文献調査の相談ができるメイン窓口。

集密移動書架



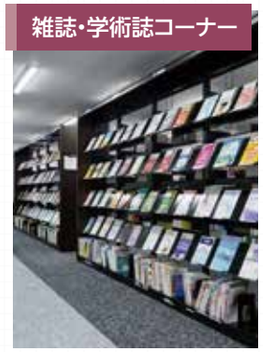
⬆集約収納で豊富な学術雑誌新聞のバックナンバーを保管。

開架書架エリア



⬆書架表示に従い、目的の学術書や専門書へスムーズにアクセス可能。

雑誌・学術誌コーナー



⬆当年発行の専門誌・学術雑誌書架。

閲覧席 大型デスク



二条図書室 利用案内　ー専門知が集う、多様な学びのスペースー

豊富で専門的な蔵書群

社会福祉・保健医療分野を中心に学術書籍・専門資料を完備。
図書室全体で約15万冊の収容が可能に。

集中できる静謐な学習スペース

個人用キャレル席をメインに約200席の閲覧席を配置。
電源コンセントを完備し、PCでの学習に対応。

ひとりひとりの多様な学びをサポート

対話やグループ学習が可能な「多目的学習室」、拡大読書器をはじめとするサポート機器を配置。

飲料の持ち込み

水筒やペットボトルなど、「蓋つきの倒れてもこぼれない容器」のみ持ち込み可能です。
資料保護にご協力ください。

携帯電話の利用

館内では必ずマナーモードに設定してください。
通話は図書室外のエレベーターホールでお願いします。

返却ポスト（ブックポスト）

二条キャンパス 1 号館 2 号館 1 階に返却ポストを設置。
図書室が閉館、休館している場合は、返却ポストへ。



蔵書検索・ポータルサイト端末

蔵書検索・データベース利用に対応。
紫野キャンパス図書館からの取り寄せも蔵書検索から。



コピー機（3台）/プリンター（1台）

館内資料の複写（著作権法範囲内）にご利用ください。



拡大読書器/とうくん（音声読み上げ器）

拡大読書器および音声読み上げ器（とうくん）を備え、バリアフリーな学習を後押し。
とうくんの利用は、カウンターで申し込み。



◆ エリア別配架資料

A 一般書・専門書
社会福祉・保健医療等の専門書籍を中心に配架。国家試験過去問集を集めたコーナーもできました。

B 新着図書・闘病記・語学教材
闘病記コーナーは 1 号館図書室から引き続き展示。各種利用案内もこちら。

C 参考図書・大型図書
調べものには、辞書、事典を。

D 新聞（当月号）
前月以前の新聞の利用はカウンターへ。

E 絵本・軽読書・軽読雑誌
息抜き、気分転換に。

F DVD・点字図書
DVD を視聴する場合はカウンターへ。

S 書庫 学術雑誌
書庫内は移動書架を配置。移動書架は自由に動かして OK。

地下 1 階 閉架書庫 一般書
入庫できません。カウンターで出納申込を。

◆ 6 階図書室フロアマップ



※地下 1 階へは入庫できません。

多目的学習室 1　グループ学習スペース

ディスカッションやグループワークに最適なアクティブスペース。
常時開放しています。
※授業利用のみ予約可（予約利用が優先になります）。



多目的学習室 2　ブラウジングエリア

ゆったりとしたソファ席を備えたブラウジングスペース。
常時開放しています。
多目的学習室 1 が予約利用中の場合でも利用 OK。



多目的学習室 1 グループ学習スペース



⬆可動式の机や椅子を完備し、グループワークやディスカッションなどアクティブに利用いただけます。



⬆二条の景色が一望出来る展望席。



多目的学習室 2 ブラウジングエリア



開放的な景色と共にゆったりとしたソファ席。

地下閉架書庫



⬆入庫はできません。必要な資料は、カウンターにて出納申込を。

参考図書・大型図書・新聞書架



佛教大学附属図書館の事業活動報告（2025〜2026年）

2025年度

4月〜6月	対面での利用説明会・図書館ツアー
4月	語学学習・就職活動・学習方法等の電子書籍／教員採用試験過去問シリーズ（佛教大学教育後援会支援金）に関連した図書を展示。
4月〜3月	紫野図書館地下2階C層資料燻蒸・現地クリーニング
5月	紫野図書館・二条キャンパス図書室サーバー機器・端末の更改を実施
10月	図書館報『常照』第72号を発行
11月	佛教大学Open Research Weeks 2025「洛中洛外図屏風」複製品展示（紫野キャンパス1号館1階）
1月	佛教大学教育後援会支援金にて書籍購入 語学学習・就職活動・学習方法等の電子書籍／教員採用試験過去問シリーズ／データベース南北朝遺文フルセット／角川ソフィア文庫・新潮選書・新潮新書

中央展示テーマ（2025年4月〜2026年3月）

4月〜6月	ポケット旅図鑑
7月〜8月	京都・夏の行事（前期・後期）
9月〜10月	浄土双六
11月〜12月	江戸で生まれたベストセラー
1月	楽しいお正月
2月〜3月	梅の花 桜の花（前期・後期）



2026年度

4月〜6月	対面での利用説明会・図書館ツアー
4月〜	語学学習・就職活動・学習方法等の電子書籍／教員採用試験過去問シリーズ／「大学で学ぶ図書館を使うまずはここから」文庫・新書展示（佛教大学教育後援会支援金）に関連した図書を展示。
7月〜8月	二条キャンパス2号館図書室開室準備
9月	二条キャンパス2号館図書室開室／室内ツアー開催
10月	図書館報『常照』第73号を発行

中央展示テーマ（2026年4月〜10月）

4月〜5月	明治時代の新しい教科書祇園祭（前期・後期）
6月〜7月	祇園祭（前期・後期）
8月	旅に出る
9月〜10月	二条キャンパスとその周辺



「楽しいお正月」
【会期】2026年1月



「江戸で生まれたベストセラー」
2025年11月〜12月



「祇園祭」
2026年6〜7月



「梅の花 桜の花」
2026年2〜3月

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

佛教大学附属図書館は、佛教大学の前身佛教専門学校があった京都市左京区鹿ヶ谷の地から、現在の京都市北区紫野に移転した１９３４（昭和９）年11月23日に木造２階建の閲覧室と、鉄筋コンクリート３階建の書庫を竣工落成しました。この図書館建設にあたっては、佛教専門学校初代校長である土川善澂師（浄土宗大本山知恩寺68世住職）に深く帰依された篤志家上村常治郎氏のご遺族から多額の寄付をいただき、完成することができました。その後、１９６３（昭和38）年９月に開学50周年を記念して閲覧室、書庫などが増築され、１９７２（昭和47）年４月には、開学60周年記念事業として地上５階地下１階建で、研究室を配置した複合図書館棟が完成しました。現在の図書館は、開学80周年の記念事業として、同窓会、鷹陵同窓会などの卒業生、在学生ならび保護者、浄土宗寺院をはじめとした、本学有縁の方々からの多大な寄付によって、１９９５（平成７）年１月に着工し１９９７（平成９）年４月に竣工したものです。地上５階地下２階建で１００万冊を収蔵することができます。



佛教大学附属図書館の建物は、「佛教専門學校附属圖書館成徳常照館之記」にある「今ココニ冠スル所ノ成徳常照館ノ名ハ（中略）繙書ノ士専ラ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」から「成徳常照館」と名づけられ、書物をひもとく者が努力して、立派な人格者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。この木額は佛教専門学校第７代校長江藤澂英師（浄土宗大本山善導寺61世住職）によって撰述されたもので、現在は図書館１階に掲げられています。また、同じく１階に設置されている浄土宗総本山知恩院にある八角形の経蔵「転輪蔵」（略して輪蔵）の縮小複製は、１９９８（平成10）年５月、図書館開館１周年を記念して、佛教大学同窓会、鷹陵同窓会、通信教育部学友会、教育振興会から寄付されました。輪蔵は、１回転させることによって、一切経を読誦したことと同じ功徳を得られるといわれています。

佛教大学附属図書館報『常照』 第73号

発行日　令和8年10月23日
発行者　佛教大学附属図書館長　細田典明
発行所　京都市北区紫野北花ノ坊町96
　　佛教大学附属図書館
制　作　株式会社栄美通信

後記

佛教大学附属図書館報『常照』第73号をお届けします。今年度は新二条キャンパスに図書室が開設された記念すべき年となりました。
歴史ある京都・二条に位置し、6階図書室からの良好な眺望と多様な学習スタイルが叶う充実した設備が魅力です。図書館はこれからも佛教大学の学術研究と知の探求を支えて参ります。